

準グランプリ



モンゴルの花

石井 萌様



夫の仕事でモンゴルに滞在していたのですが、2019年の1月頃から心身の不調を感じるようになりました。夜眠れず、涙が止まらなくなり、過換気症候群になりました。
外に出られず、鬱々とする毎日が半年ほど続きました。
モンゴルは緯度が高いため、夏が近くにつれ日が長くなります。ある日の夕方、家の周りをぐるっと歩いてみると花がたくさん咲いていました。旅行者用の日蒙の植物図鑑を手に入れて、ペーシがバラバラになるほど引き比べました。思いがけない楽しみを見つけて、夕飯後、近所をゆっくり散歩するのが習慣になりました。



7月に主人が国際運転免許を取り、アパートの裏手にある山までドライブに連れて行ってくれました。シラカバやシベリアアカラマツの山並みを見ながら、2人でコーヒーを飲みました。モンゴルにこんな景色があったとは！
結局、8月いっぱい帰国することに



なり、モンゴル人の友人たちがお別れに郊外に連れて行ってくれました。若い女の子が、ウメバチソウをたっぷり摘んで作った花束をくれました。友人が、聖書に「野のユリから学びなさい」という言葉があると教えてくれました。心配しすぎない、という意味だとか。
私の体調不良を知った友人たちは地元ハーブを持ってきてくれました。なかでも私に合っていたと思うのは、キバナオウギの根を乾燥させたもの、それからシーバックソンのオイル。思い出してみると、道端のイラクサやヒヨスが毒草だということを、ほんの小さい子どもも知っていて触りません。モンゴル人は満開の花を見てもあまり騒ぎませんが、植物の役立つ特性と危険を深く理解していました。
植物のある場所に身を置くことが、私に一種のセラピーとして作用したことは間違いありません。見ることで、触れて匂いを嗅ぐこと、口に入れること、それ

審査員講評

住み慣れない土地で、不安と戸惑いが心の負担になっていたのでしょう。か。日が長くなったという四季の変化が外に出るきっかけになって、思いがけず出会った彼の地の植物に興味を持ったことで心がほぐれていく。外に出たその一歩が、ガーデンセラピーの扉を開くことにつながったようですね。想像していなかった景色を前にして、美しいと感じる健全な心を取り戻し、また、植物に秘められた言葉やハーブの効用、モンゴルの人たちの植物への眼差しにも気づく。植物を通じて人々の優しさにも触れ、第二の故郷ができたこと。貴重な経験ですね。

GARDEN STORY
ガーデンストーリー
編集部



を通じて人と関わること。またいつか、彼の地を踏むことを願ってやみません。